

崔書勉先生と初めてお会いしたのは何時のことだったか？ 当時ある研究会を運営しており、一九九七年八月に、伊豆天城で三日間の合宿研修会を行うために、先生に講師をお願いに上がることになった。

研修会の実行委員長をお願いしていた外務省の小川郷太郎審議官のご紹介を得て、六月のある初夏の陽の光がまぶしい昼下がり、狸穴の外交史料館（先生は当時赤坂在住、史料館は先生の研究室でもあった）に出向いたことを昨日のように印象深く覚えている。早速にその晩は先生に誘われて飲みに行った。

「光陰矢の如し」、その時から早や十五年の歳月が経過した。

研修会での先生の「歴史認識」と韓国の講話は、該博な知識と、史実に基づいた、具体的かつ極めて巧みな話術のお陰で、大いに盛り上がった。その後の先生を囲んだお酒が入った夜の歓談の場でも話は尽きることはなく、そして「韓国に行ってみよう」ということになった。

韓国への旅は、崔先生をもったいなくも先導役に、六人の女性を含めた二十名のメンバーが参加し、十月の爽やかなソウル晴れの中、三日間の短い旅程ではあったが、韓国各界の高位級人士と親しく歓談の機会を得て、これ以上は望めない極めて密度の濃い、快適、かつ愉快的な、実りの多い旅になった。

日韓関係の歴史については、断片的な知識はあっても、一知半解の私にとっては、将に「眼から鱗が落ちる」とはこのことであつた。

崔先生のお話によれば、八世紀に編纂された「古事記」「日本書紀」は、三分の一が新羅にせよ百済にせよ韓国の話だそうで、「日本の研究をすることは韓国研究の始まり」とのこと。また、「文祿・慶長の役」「朝鮮通信使」「江華島条約」等の東アジアにおける歴史の意義も改めて理解できた。「史癖は佳癖」、歴史が好きなのは、良い趣味であり、歴史を学ぶことは人生を豊かにするそうだが、今更ながら、崔先生には、その意味からも大きな恩恵を受けたものだと痛感する。

その後「日韓談話室」に参加させていただき、金鐘泌・金守漢・陸寅修・李東元先生等々の警咳に接し、日韓関係の先達の方々から、現代韓国、朴政権時代の功罪等について、身近な視点からの生きた歴史を学ぶことができた。

伊豆での研修会が終わった後のある日のこと、先生の親友、藤田義郎先生（元産経新聞論説委員）から呼び出しを受け、今までの崔先生との交友関係について、いろいろと面白いお話を長時間にわたり承った。別れ際に一九八八年発行の「崔書勉と私―崔書勉滞日三十年記念文集」を一冊いただいた。

藤田先生は、その文集に崔先生との七三年の出会いから八八年までを「『感電』させられ通しの十五年」と書いておられる。その中で、朴大統領に崔先生と共に夕食に招かれた時、「隣りの大統領が滂沱たる涙で泣いていた、何と云い純粹な人なのか、云いようのない感動に打たれた。本当はそれを書きたかった。いずれ二回目の『崔書勉と私』が出るならば、其処に譲ることにする」とあった。残念ながら、藤田先生はその年の十二月に亡くなられてしまった。

今回、二回目の「崔書勉と私」が二十四年振りに寺田佳子・森松義喬さん等のご尽力で発行する運びとなったが、藤田先生にはもう書いていただけないので、崔書勉先生には近い機会にこの時の逸話をお伺いしたいと思っている。

私も藤田先生と同様に、崔先生には「『感電』させられ通しの十五年」であった。今になって考えると、藤田先生からは文集に仮託されて、引き継ぎをしていただいたような気もしている。

一九一九年三月には、まだ春浅き北国を明治四十二年（一九〇九年）十月の伊藤博文枢密院議長の足跡を追って、韓国独立運動家安重根氏の命日（三月二十六日）を軸に、崔書勉先生のお伴をして旅をした。大連を経てハルビンの夜はひどく寒かった。ハルビン駅頭の伊藤侯の暗殺現場、安重根氏が留置・取り調べを受けたハルビンの旧日本領事館地下室（今は安ホテル）、長春の満州国仮宮殿、安重根氏が刑死した旅順刑務所等を訪ねた。

大連の昔からの重厚な大和ホテルでは、崔先生は伊藤侯に扮し、ソファにどっしり座られて大分お酒を飲まれた。旅順では私が安重根氏に擬せられ、崔先生の官憲に捕縛された。崔先生は処を得て神出鬼没、寺田佳子・西垣正邦・白石允子さんと計五名の少人数の旅なので、各自自由に行動し大いに愉しんだ。最後は北京に飛び、権丙鉉韓国大使と歓談。当時の薄汚い夜汽車に揺られた過密な日程だったが、想えば皆若かった。

次回は安重根氏の足跡を追ってウラジオストク経由でハルビンへ行こうということになったが、残念ながら未だに実現していない。

崔先生の東京在住時には、先生の誕生日が四月なので、毎年のように誕生日を兼ねた花見の宴を、恰も年中行事のようにご一緒させていただいたことが、今では非常に貴重な日々として眼に浮かぶ。

先生は、論語の言葉として、時折、次の言葉をあげられる。

「務本 本立而道生」（本を努む 本立ちて道生ず）

グローバリズム、リージョナリズム、ナショナルリズム等が混在し、益々混沌に進みつつある世界において、何事も根本を把握するよう努力すべきであり、根本のことをやっていけば、あとは自然に法は立つものだ、という意味である。崔書勉先生には、今後とも一層お元気で、広い視野からいろいろとご教示をいただきたいものと、心より念願している。